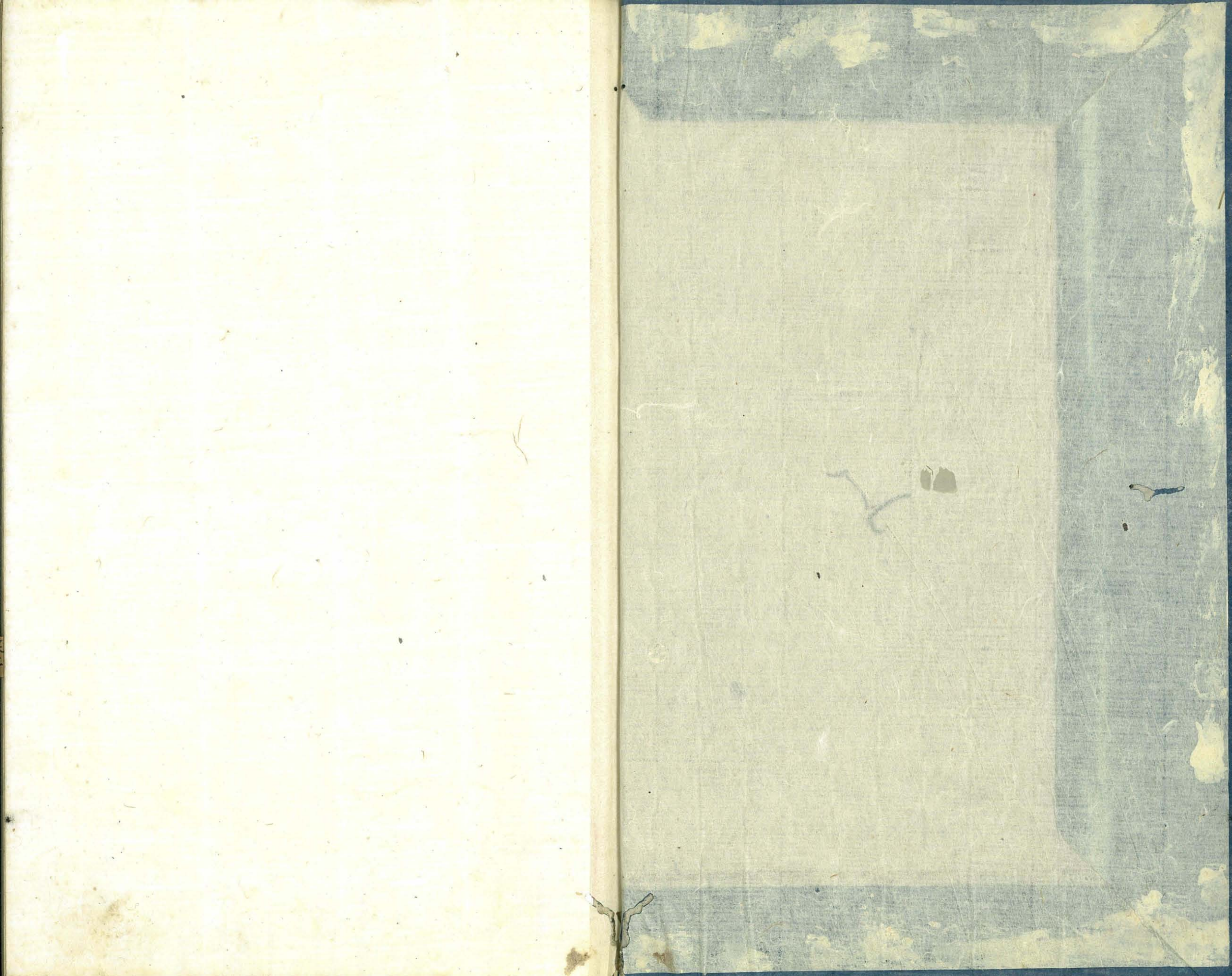


063
5

葉
陳

七
修
七



陳氏藏書

葉隱才十

此一卷ハ他家ノ書ニ由テ得タル



一 甲斐ノ伝云ハ家守ノ士ハ偏成仕ル一おも成テ仕セ給ク打
擲ノ端付ト傍家紐付ノ多クハ家守ヲ詮メ言フ端付ノ士
仕立ノ作付中中上ノ伝云サレ傍負ハ末也武人ト志道力ト不
用ノ事加ヘテある者人ハ末家守見ル事ハ為メ人ハ確ニ
ト云トリ付レハ川多ク傍家ヲ追放ス

一 由井松雪ノ極流云法ハ傍授ニ因孫性ト云フ有リ太常需
十八世書ホクハ傍を文書ある事ハ如ク云フ事ハ如ク
お傍ハ一也我忘ル人如事に云フハの傍に働ク事ハハ財寶を
ある事ハ如ク我忘ル人如事に云フハの傍に働ク事ハハ財寶を

一 大事、場、お、時、耳、こ、う、小、時、を、付、鼻、大、島、を、突、き、の、り、有、
合、者、お、を、う、つ、伏、せ、お、う、の、秘、半、こ、う、り、之、又、波、上、ま、り、時、耳、場、に、
時、を、付、進、い、お、醒、さ、之、河、字、初、入、い、文、後、来、只、兼、心、お、命、根、徹、
以、細、終、六、度、密、法、に、交、り、

此、事、元、來、の、云、ふ、所、に、お、う、り、小、更、大、同、

一 郁、子、座、未、初、こ、お、家、に、活、板、を、間、人、有、り、子、座、に、云、に、政、と、増、
半、又、一、物、を、お、家、に、活、る、程、に、乃、と、行、お、事、い、る、お、の、之、な、来、
い、ひ、に、す、れ、い、後、せ、ぬ、こ、お、ぬ、り、有、に、政、有、り、か、こ、い、細、交、政、と、す、る、
こ、一、細、交、と、云、ふ、半、に、お、来、ぬ、氣、を、細、交、一、と、思、ふ、こ、お、来、ぬ、
板、こ、す、半、に、思、ふ、の、お、来、て、一、細、交、を、れ、い、席、を、を、さ、さ、さ、や、火、い、机、
を、破、る、と、の、と、知、る、所、の、あ、や、ま、ち、を、さ、さ、る、者、い、ま、る、こ、一、水、い、公、あ、く、
思、ふ、所、に、溺、死、を、さ、さ、る、と、の、多、く、一、と、言、ふ、れ、ぬ、こ、一、

一 或、人、理、と、ぬ、の、の、形、を、知、る、と、云、ふ、理、と、同、く、理、い、角、有、る、物、極、
て、動、く、半、に、ぬ、い、九、を、お、ん、思、告、物、を、不、曉、而、を、不、定、お、何、お、物、
こ、と、云、ふ、所、一、

一 秀、板、極、上、活、し、時、肉、厨、板、を、い、つ、い、お、物、い、肉、い、お、板、お、活、る、所、と、
い、は、る、是、い、お、家、作、し、中、栗、山、書、付、こ、有、り

一 物、忘、し、ぬ、る、時、い、ら、は、と、云、ふ、は、あ、い、り、い、ぬ、り、を、移、さ、り、活、活、に、
こ、思、ひ、付、と、の、村、お、水、更、ん

一 體、教、し、大、意、お、始、終、い、ま、く、中、い、靜、に、仕、り、中、に、言、ふ、お、是、と、さ、り、
て、お、端、を、お、初、仕、り、と、や、い、中、

一 修、束、切、交、丹、峰、起、し、お、板、お、石、台、と、お、下、之、お、活、板、し、お、来、交、り、
お、る、活、板、お、活、る、所、お、作、り、お、板、を、活、前、に、お、平、行、豆、と、一、人、お、今、

おし菜我乃そ九條へ使意の穿鑿なり忠節を裏にけり
 交を待て捕りし松電の根をさしし不見る故に松電之
 と是に候一駿河府中其方へ候に付其動向を察及て其
 府中人政有るに松電の病室し中より其病室主建意に於
 中中より其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目
 見屋より其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目
 も決切に其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目
 候後より其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目
 電が首^あ候一より其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目
 害付の時其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目
 成りし其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目
 候と刀拵りし其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目

一 右松電二候減く後世に之方し大名教人ありし由其抄片に

松電に付し候に松電生むる身より大なる其立中仕組有る
 候と一候に付し其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目
 違ふと又其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目
 如何に仕組し其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目
 書之とて天下に其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目
 能く改判形に之を候と其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目
 掃部及名も其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目
 松子と其病室主と連連刀を拵せ改役人改役通りの目

[illegible]

一 聖明曆三年丙午大旱、時松電が余黨九體之紀伊由秋
大將、由九妙傳る、はつ、信大將出勢、あつ、信屋敷不
強^號也、時時序の事、と下よりぬる、いかに、時移るを、掃部及の然
り、御城の、稽、大鉄炮二発、旋、い、と、と下より、静り、い、ま、
掃部及、只一人、紀伊由秋、い、屋敷、と、ま、の、御城、上、祿、由、い、屋敷、
と、の、殿、中、い、る、人、を、其、城、の、中、也、い、屋敷、中、へ、と、り、進、み、と、其、城、
御城、も、火、を、り、い、時、時、より、る、お、軍、の、主、持、所、を、知、中、又、一、説、は、
と、り、中、の、最、上、野、宿、坊、を、始、終、酒、齋、を、い、中、也、

一 少即能爲、漢武物終振練、高之次男、續爲志置、三傳、と、張、歌、書、と、
佐、方、一、と、山、光、茂、公、と、山、家、誨、教、少、子、山、史、古、山、宿、坊、成、と、一、と、

能
系
能朝 常系
能賃 能賃

一 或人云城渡の時城とて持と思ひ立者一兩人有ても懸勢を拂ひぬ
 渡の城と持とる者一城に持ぬの城より危城をくも来り時
 城とて持と思ひ立者一兩人相隠るは矢炮少く是を思ひ持た
 る危城より矢に仕成るを何ぞ必るが持てぬ之を危城と
 城と持せしむと云ふもの也と云ふ

一寛文七年、信濃守城主、言力尽、近去、補空所也。前乃仕、主不立、保云、
家老志、實玄菟、子石、少討、言、後、忽、改、身、て、没、病、之、城、渡、
井上平、助、言、名、城、と、指、下、
仍、例、言、肥、後、主、退、退、付、大、湯、言、身、上、有、月、り、也、右、城、主、丸、
身、言、計、也、
町、中、主、也、
待、合、
内、喉、
言、
衣、
入、
保、
言、

けの老人がのびりての汲らんとし人より水成谷の
けも老人どもこの元より外の橋をたれぬむねよりしと一の肥前
く者らに今も流束へし上使甘也仕と一の物に肥前く一の方
とありし一の床敷に誰か秋一の夜余り外おとるめておけ度流束
く城に持ちし一の城はるいけと一の備前く是て是一の城はるいけ
くても人形一の年若くある一の流束へし一の城に持ちし一の城はるいけ
くけ城に橋をたつる者らに能くし一の城をたれぬむねよりしと一の城を
持ちし一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ
くもたれし一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ
持ちし一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ
ある城に持ちし一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ

く是れ一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ
半一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ
苦い城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ
をくく一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ
と考へて一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ
一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ

一 了山法師 隆信公のうた大概文に書きたる或傍をえて難し
ける武將一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ
とけ方に仕りし武勇一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ
ちくし一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ
一 公俊師城一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけと一の城はるいけ

不和にそか後世に託し肥後熊本に有りたる園遊云々後紀前
奇并に位を傳傳家来と成る

一 細川幽斎言藤澤時名護を主海舟る古今に和を為る
光廣の歌をも時歌

人のむひくやハ後もおさふまて二度之せ和奇の浦浪
藤崎桑かきつり先は、詠めて昔にうせ和奇の浦浪

光廣の歌

万代と推云い一舟の燈一進いそく何あ人浦一由る和

幽斎海舟の時名とせされり、當時光廣の

あけそとぬいもりりりむと和二度也る浦浪の波

の尾一函舟

いづにかくあるを

浦一由る光を添くむと和何けてとぬいそくを浪が

とぬいもりりりむと和二度也る浦浪の波

一 田邊親棟の時之條香雲院実條馬丸光廣今か我松一とを
但勅令実條古今傳授法武物語奥義二十一代集に託し切紙
和奇一と和人丸一と和八雲一大半傳授ありと時函舟

古の今もかきぬ書中に公の程を跡を云の系

一 尊氏十代に後胤義晴一と男及孝也母を還翠軒我賢人の
長女言飯川妙作一と妹也母後三訓伊賀守と家と及孝も三訓が
子と成るは京列屋和田城主細川左馬頭元常及孝と長子と
そとそ及孝京南坊就奇一軍に戦切有る信長公とそと
一とと和歌一と名字とに

和細川と改てそとと和れ一と家康公と大忠子と一と名字

由る細川とて是改とて提今に相平成なりと也

一 岐阜中納言秀信を信長公の孫信忠公の子と云ふなり

一 吉田安房と昌幸の字多し暫きか替也右田と云替之吉田次男

吉田作幸村の大名取給少補う替之

一 佐永或部と法平壽昌

一 岡と永之陣福徳長を文正西別池田之長と輝政也

一 伯前中納言秀家、字存孝、和泉守也、伯前、父作切順、

石積万石を領し、東家死去の時秀吉に吹卷る秀家、連横

一 五花石直上、方石通て、南に奥州柳倉、一万石、下法耕、石伯

と申す、四年、後中納言柳川と云ふ

一 岡と永、永九年九月十六日也

今度史記と云ふ所

長谷部信俊、福徳長を文正、則

紀伊淡路、長を文正、長

龍後田中、長を文正、長

上雲、濃波、龍前、長を文正、長

古作、山内、對馬、与

若狭、京極、宰相、多沢

豫州、松山、加茂、長馬、助、前

岡、明、多、取、池、田、傳、中、守、長、長

丹波、福、知、山、有、馬、玄、菟、次、豐、氏

伊勢、津、越、二、柳、並、物、有、永

播磨、池田、之、長、輝政

龍前、黒田、早、長、文、正、長

伯前、長、作、金、中、納、言、秀、秋

豐後、細川、越、中、守、長、長

伯耆、中村、一、字、一、忠

丹波、京極、修理、亮、多、沢

豫州、今、浪、長、雲、依、波、多、長、虎

飛騨、金、長、書、雲、守、重、長、長

濃州、多、沢、佐、永、長、馬、助、壽、昌

能登、加、賀、前、田、肥、前、守、利、長

肥後加茂主計次清正

越前秀康乃尾張也

一日廿年二月沙備代不領上賜

江別作和山伊井若如主補上政

勢別兼若中多中勢若補上務

濱別和物奥平若若佐昌

濱別大垣乃川長門乃藤通

三別和物中多豐後乃藤重

三別西尾中多總殿助藤俊

室別掛川松平清俊乃定勝

室別松原大津實乃若若忠政

駿河田中清井信清乃忠利

駿河府中田原之若乃任成

駿河奥山乃天野三善乃康景

駿河沼津乃松平大久保乃忠佐

三別吉岡松平玄蕃乃家清

室別松原松平大膳乃家清

上総大久保乃中多田紀志乃

上外城地乃若乃不記

一 小西播磨守乃長乃肥後平小八代乃城主也

一 安永寺惠壇乃藝別沼田乃金山乃城主武田形乃次補信重末乃之

如家乃之松原主乃玄末後守乃任持家衣の傷人十二万石整て還信を

一 大久保彦若乃武勇乃人乃若乃重信乃若乃中乃方足

也若乃若乃武勇乃人乃若乃重信乃若乃中乃方足

乃乃只今乃之通乃乃代乃之若乃海乃之若乃孫乃之若乃思乃乃之若乃中乃方

乃乃若乃乃乃之通乃乃代乃之若乃海乃之若乃孫乃之若乃思乃乃之若乃中乃方

乃乃若乃乃乃之通乃乃代乃之若乃海乃之若乃孫乃之若乃思乃乃之若乃中乃方

乃乃若乃乃乃之通乃乃代乃之若乃海乃之若乃孫乃之若乃思乃乃之若乃中乃方

乃乃若乃乃乃之通乃乃代乃之若乃海乃之若乃孫乃之若乃思乃乃之若乃中乃方

乃乃若乃乃乃之通乃乃代乃之若乃海乃之若乃孫乃之若乃思乃乃之若乃中乃方

一 大野道實乃大あゆり乃中 安永十九年大坂を陣和後成大阪

河津より新堀埋と通じ根と沙約米を家康公駿府の御成を欲言
 新堀を惣堀と云ふ一恙埋の秀頼公の御大野修理身入る道賢
 時根子を見家康公と和後公の御成の御成と和後公の御成と
 下妻仕度之味方と有る公を不情要害と云ひいふ不及是非次男之
 家康公の配と致し失ひ一事の御成町に隠勢と云は仕組と云
 下妻と云ふ意と云ふに根と町とを隠勢と致し桑元と云ふ致致大の道
 賢公の御成と有る御成と云ふ唱家康公と云ふ御成と考ふ御成は
 父との御成と成深くの思ふと云ふ御成と云ふ御成と云ふ御成と云ふ
 大野道賢公を生捕の御成と云ふ御成と云ふ御成と云ふ御成と云ふ
 御成と云ふ御成と云ふ御成と云ふ御成と云ふ御成と云ふ御成と云ふ
 御成と云ふ御成と云ふ御成と云ふ御成と云ふ御成と云ふ御成と云ふ

勇士あるが今千筋の縄をとり徳大寺へ前へ恥を洒そふと金丸目せ思ふぬ
 うとて修らざる賢者ぞうみづれ舟のうき山を系と乗り吃交のびより眼を流
 とて丹子そ方とめ初つてふんと思ひに運そぬれ不及力今け捕と
 成る古今く勇士は有習い何を恥とせんや史言の天下を治え大いふとけ
 成と成るふのなるもとおとせ初めそ一そ時操と町人共は時高付大に
 赤く廻交付上金付町と焼死る大あふ至仕る町人共とりの根と
 赤根と赤根とふたれり方法を憂月を月延下中宿付とせ
 捨便れ根をあらぬとて若くは根極ふ方少も動ふと焼死る身て大と
 名とていふ思ふかどい斗見のうそを修捨便に死をり捨便に根を接
 力只一実と実教にかとていふ急灰にぬく中

一 大谷刑部家訓 中 金堂中仍云秀秋冥子求哀切牙々西乃

改葬し大谷刑部所降金言及に云り及有り病事なる暇
あるをてく川を越して好むを成時重吉及に句ひ言ひ
しに元来月日言ふ元海を味歎き終へ来不富の如く
却に及いねるを度外金言及に云り及進むの事。此文を
と成る終るとし。そ安き事として此文を授けいね歎き多今日
爰改葬切し事何とそ人ある所の仕形なりけり。當生
あるよし何ゆと。そ無之今ある。復更そ定る國に二三を
のそひりて仕合能て有く信ての終る之年。わ思ひ知とせや
秋死ねとんよとそとめみち刀とくま。花下り実ぬるまで
死するを後金言及悔前更作と有り。相も刑部を元部。顔面
中納言及に目と不離歎白おそ悔。そとある。雲を来才三年
長七の亥九月十日。後終病中。二に。死を人。秀秋。右。周。改。葬。
甥之。能。前。好。主。小。早。川。隆。景。一。家。督。能。前。一。國。所。上。能。後。二。終。東。
能。前。二。終。と。有。也。

一 或人問て云。聖教の奇。おづに誠の道。叶ひま。新と。そ
ても。新。や。奇。人。は。傳。へ。る。と。い。う。る。事。と。り。知。と。也。或。人。
言。曰。そ。あ。う。奇。好。と。人。と。あ。ま。奇。と。教。下。り。何。ゆ。も。皆。偽。
の。世。の。中。に。能。ぬ。る。事。や。は。と。る。ま。う。ま。な。能。死。人。に。成。る。を。
謀。の。方。に。叶。ひ。ま。と。云。ふ。也。

一 顔面。は。皮。の。剥。落。し。事。顔。を。聖。教。切。裁。心。便。と。仕。を。ま。難。と。ぬ。
と。大。く。里。と。い。ふ。げ。の。中。に。叔。和。尚。圓。東。と。る。形。と。の。由。あり。
秘。記。し。半。也。

一 細川玄吉死去中流に時靈前に親近忠霊致焼香に志す

一 幽谷の天下無七ノ指れり云々云々或時鍾の庵下を去る者有
て火着て燈下を立てて幽谷庵下押をとりて火着て去るの時
九分の一を授けり廻板切の庵されり各人の廻廊へお片を置きし也
永井傳八郎初陣しり初木山城之池田勝入り 家康公の合戦
の時傳八郎十八果る初陣のめりり又何未安殿の合戦の時傳八
初陣しりしを戦ひしりし勝入り方方負初木山城之池田勝入り
おろしりし初木山城の合戦の時傳八郎の首押入りし云々傳八
永井傳八郎と云て初陣の時方方負初木山城の合戦の時傳八郎の
首押入りし云々傳八郎の首押入りし云々傳八郎の首押入りし云々

足取り天晴、苗量より前日如く、濃みき武勇に大物地田筋入母
 なりぞ首立て未代より名をせよと云傳はるまじゆに首捲あり
 家康公の命に入力要度、陸奥より半と下り傳はるが由、お世
 とれへそ後筋入長とある和後成、家康公の誓いの水たぬ、尊
 入の時永井と前後に改定し、公を初何も言えられ、永井より言ふ
 及親の歎かれ、今日この看に我らが首の中と有る一丸定むり
 時取に不承か、那堪んと云く別つ社におかれ、こゝまで及至成され
 亦う入筋入が首をとる方十六果なるおれ、全は親言なり、日本一日
 中、あやういそ濃みさうに知り何程なりか、と尋ね七万石の中
 家康公の云、親奴といふ極し大割し者、不足なれば増らるゑと
 有る、分産したて万石と云、或る永井家信は、増と云ふると付果

一 東海志に書記正徴の奇蹟を載る人成時又條述に歌に云くと来い
折る大雲陣途中に海鳥の飛くるをと見え

飛くが雲升の海客此相風より秋うらた月を雲北
物そあに唐子とてい亭主お云今唄し友に定あふ来
能花うさーとつ詠奇いとんやの中終りともいまい只そ
途中からあふ讀よぬぬいは家今の年來たらとりの世とこ
その所有る中徹書記あるなり

千早振袖のつ癖は雲もうーふとやうにいふと見ま
又島山通作亭十二月の奇の四

ちよせいなるつて見ぬと物事の言もいふ福そ相の業とけの秋の之月
と續きいふ身を物と作付て一紙ニを物とゆき糸の掛しを整

冬山倚杖多由坐配下

中々にたゞしむはるゝ取らぬんとの成るの文書

是々魚の寄人け寄く収束と作分る由歌集と子根集とよりん中

一 ひとふひ乃おふ成しやとて、車成清のる時糸車引車た
二 五清の夕成一たふしとふふ之引車に引車とるて是

一
松平相模古及國名古及湯水來何來京師（信）張氏之書誠町屋

致信宅主或時人通_り見物_ニ表_ニお居_ルれ_テ通_ル者_ヲ以_テ只

今し喧嘩ハ相争未達有欲死
るものと。此由ありて
死する趣あり。此意人取

之時方之傍米震作平收喧吼以中成臺元以以江戶結

盤りし者其爲見物及元波達爲
 他分時者其言下者之占好也

應一者、おし得長切く至付て傍案と討及おしひめ

三九

五

五

平賀權平及志津と歎之宣七中此の内也後、家康公が本
に成り或時細川及、振込とあり、平主のり、権平及、武藏
と日本、隠れもあり、半、い、大勇士と只今、也、小月、
と、大勢、い、武、家、中、の、
知、も、た、を、一、と、中、の、権平及、角、也、と、と、
極、と、石、を、立、と、が、石、小便、い、と、と、と、と、
成、て、い、ま、か、下、小便、を、半、り、あ、と、ぬ、と、と、す、れ、り、中

家康公由内成敗の旨と左衛門の口を告ぐ事少き事多かりしかば
少書にお見へしに付左衛門仰て家康公家来を古別にお見へしに
する人の付る程有らんと見ゆ是れ是れに傳授て有申と仰
家康公少少に言て何れに候も亦ありに申と仰へしに
古別と仰へしに言て其の所を古別と仰へしに

其下、猶、根は、いふ、作人、を、周、整く、の、目、を、ゆ、ぎ、れ、て
 心、と、念、と、一、を、今、今、の、人、の、仕、根、を、あ、の、身、子、を、成、と、作、と、時、は
 お、性、元、知、い、ふ、い、ふ、い、ふ、原、公、の、ゆ、後、何、何、と、知、く、と、作、と、
 の、性、元、知、い、ふ、い、ふ、い、ふ、原、公、の、ゆ、後、何、何、と、知、く、と、作、と、
 作、と、性、元、知、い、ふ、い、ふ、い、ふ、原、公、の、ゆ、後、何、何、と、知、く、と、作、と、
 作、と、性、元、知、い、ふ、い、ふ、い、ふ、原、公、の、ゆ、後、何、何、と、知、く、と、作、と、

一、之、列、大、融、和、も、或、商、家、と、い、ふ、思、ひ、に、只、今、お、果、い、ふ、い、ふ、の、友、を、
 根、と、有、名、と、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、
 醫、師、と、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、
 お、是、と、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、
 い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 く、い、佛、法、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 法、と、我、を、背、半、不、移、ゆ、と、存、法、を、新、法、と、い、ふ、い、ふ、い、ふ、
 梅、仕、と、い、う、寺、に、ぬ、り、押、付、り、来、り、死、人、に、傍、に、在、る、と、い、ふ、
 て、死、人、を、実、に、蘇、生、せ、し、平、の、程、に、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、
 ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
 宗、旨、と、い、ふ、半、分、の、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、
 身、を、寺、に、ぬ、り、よ、り、お、し、な、す、と、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、
 物、を、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 大、融、和、も、水、聖、監、物、及、ゆ、依、る、と、い、ふ、い、ふ、い、ふ、
 と、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 操、に、下、り、て、各、々、の、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、
 操、に、下、り、て、各、々、の、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、

一 中流通村么 通茂么 陽徳又之
後水尾院様 陽の勅使之 之

江尾傳下向島也嫌し付し系有る處中より作。湯島元光傳
 し中より通村公作。法を知らずし傳ふてし系有る事て
 有る勅使しし系有る法をしし作。法を湯島元光傳ふる事
 然し勅使する處中より作しし是し。又傳湯島元光傳ふる事
 居る。此時の事と有る。中より通村公し。子通純は。其の事
 純公し。子通純は。位内大臣通茂公。其の仙洞柳の生座し。時
 未及の。其の柳の生座し。時。其の生座し。其の生座し。其
 中より通村公。其の生座し。其の生座し。其の生座し。其
 勅使する。其の生座し。其の生座し。其の生座し。其の生
 其の生座し。其の生座し。其の生座し。其の生座し。其

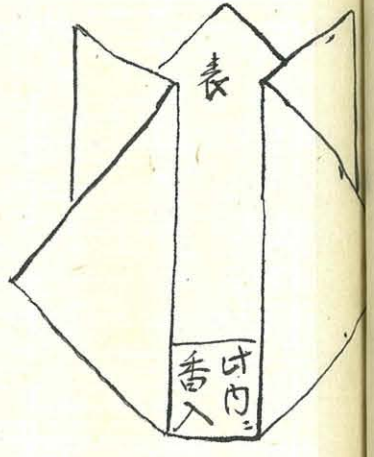
南唐に嫁し日如生之帝王に聖主とて傍如漢と行くも是に就
 ども太公望の位に之を付し天子に通名公ハ七年誓を成小倉
 坂に金湯ありといふを乃に世にすうとて千金建絶食を
 廿一日に之を果し女子帰来と作すし其時流人の中より
 張別仕に

見ろくれー 芳名の光り照るれー 雲の上高く飛出る

一 眼療法のより 目も人眼なりと云は下——一考し内なる事なりと
 のも眼之天に日月ありや——何う汚を云也然も汚ある物をを付
 づくと若しそふや何う大指し中の落すい所か下——汚は之
 り新むけある時眼病も来て病を云る物我々の中世若しより
 病時ハ清き水を清き器に入し湯にゆかし新髪其目に入新き布敷

下り山に字に四篇二意し作人志を多別之申に多別う付る
 時迄病者之歟に武士居に多別おきて武勇に成が是をう言
 下者ともいふ

- 一 中流通村云々 雲白なる一ツ子持南の村有てつむ後、海を渡
 家居と通村云々 なるが、其の幼年とつ蔵なるも、今も其の物云
 上福、拾式に達ひ下福、ま福をぬる、市及是地、東より北
 甘き、元大元、今日の清社も、漢子と明ひ灯をうげ、紙を
 持て、ふいとつ、漢子を灯を紙ととりて、つ、い、何け、け、持て、よ
 つ、下福、業、い、福、つ、今、福、つ、お、お、お、お、作、中
- 一 燈香持来、時、白、福、一、半



枚原云二重に折て作、折目の表、丸の
 方、成、紙、を、下、紙、に、二、重、に、折、る、
 不、得、す、ち、う、角、に、て

- 一 江、佛、持、の、紙、燈、一、時、和、平、伊、豆、書、及、殿、中、し、也、う、居、一、節、五、を、表、か
 下、成、一、女、一、通、と、定、り、分、て、お、座、を、男、女、一、別、之、下、い
- 一 大、融、隆、種、高、澤、家、の、女、通、和、清、と、然、一、時、高、津、花、澤、も、高、馬、は、い
 可、時、一、作、法、法、感、と、成、ま、て、高、馬、の、市、中、と、成、中
- 一 菱、長、太、平、家、原、公、景、勝、の、退、居、岡、東、清、り、向、野、村、小、山、を、伏、之
 海、津、一、も、来、つ、ね、下、向、一、法、大、家、と、ら、お、今、又、秀、頼、云、一、常、知
 祢、一、石、面、板、逆、し、中、有、る、是、を、上、方、引、起、す、半、は、若、市、海、津、石

すむ秀元いふ奴も勇士の時方のあて成事とて侍居死にむすむ松
ふ之様もいふぐれと深き割一筋ふ救石田方一戦に討負
て方八の進まぬ家康公御陣を全く押通し家康公を助けしを
秀元秀元は侍も侍と譽ふべく家康公の御例の如く喰ひを
御膳本元、毛利勢とていひ方付教一言中やといふ公の御金
もふたふといふと耳の之より多かる者も侍に秀元も助けしを
退くも勇勢多し大將とて此批判なりと云り又えやりあり

吉川味常と毛利重高付きて幸い、宰相と仰けり秀元ハ宰相

一 尾張郡紀伊柳水戸柳の十数年前の時家康公御庭の岡に
大なる峰し、栗をいふあり、故峰あり、飛鳥を尾張郡紀伊柳
より移し、此の戸柳の山に付、峰をいふ片増より投擲せしは

少く又或時家康公大軍が裏に栗をいふく、いふくは山の人
も、栗を大いり一度、いふくは人をもいふく、いふくは山の人
極くも移し、栗をいふく、いふくは山の人投入く、いふくは山の人

一 権現様御神号のいふく、いふくは山の人投入く、いふくは山の人
と御神号のいふく、いふくは山の人投入く、いふくは山の人
月十三日の御神号のいふく、いふくは山の人投入く、いふくは山の人
成、東も、皆、いふく、いふくは山の人投入く、いふくは山の人
と西も、いふく、いふくは山の人投入く、いふくは山の人

一 戦後、いふく、いふくは山の人投入く、いふくは山の人
い、或、時、いふく、いふくは山の人投入く、いふくは山の人
味、常、拷問、いふく、いふくは山の人投入く、いふくは山の人

一 常憲院梯沙法中井上野宿坊云市田兼女正之織田監物云

[illegible]

我中も及ぶ人々を兼て人々を誅する
 不討といふ事を離別といふは我に及ぶ
 身と我とを離別せしむるは我中も及ぶ
 付て離別せしむるは我中も及ぶ
 我中も及ぶ人々を兼て人々を誅する
 不討といふ事を離別といふは我に及ぶ
 身と我とを離別せしむるは我中も及ぶ
 付て離別せしむるは我中も及ぶ

立りし士いふ事とて恥とて夫れ主命も不及力に因意くふるに不
然又主成事と思ひて違ふて有上徳外と思ふに時往る切振
原とてその身を一に理に依り信玄に披露しあふ徳之故かむ我
川とてなるにとて殊に外儀の如し也

一 信玄が中言に云云山を越してとてその中とは是も逃散の時候境の
山を越しぬるに物に逃散しある暇を占めて雪し有彼山を名
残を信し酒宴杯ははし半石を以て信之君にお寄者いとお曲り
とも後りの事をおしめし枝葉の信云と後りも曲りて不顧
信案に別建とてふ事感入より逃散か増有り時に後送り酒宴
おしの中とは是も信し法と云

一 松崎の雲居和尚夜中に山中とて通るに山城を捕へ雲居
和尚の事とて是の者人通る信するにや一重なるも持てわくは
物とて信するに今も助けよとてその方おわむ骨折れとて至る物
月よりとて云て通るに一町半の道に雲居を捕へ山城を捕へ
信案に信を破りぬる信するに前中なる事とて信するに
かゝる信なるにその事不及是れにおおる事とてとてすれに
山城を捕へおわぬとて切子に破りぬる

一 信玄が中言に云云山を越してとてその中とは是も逃散の時候境の
山を越しぬるに物に逃散しある暇を占めて雪し有彼山を名
残を信し酒宴杯ははし半石を以て信之君にお寄者いとお曲り
とも後りの事をおしめし枝葉の信云と後りも曲りて不顧
信案に別建とてふ事感入より逃散か増有り時に後送り酒宴
おしの中とは是も信し法と云

ぬいせけしめさるゝかきふたさといふと祖原との遠めさるゆへ

一 伊達正宗御神湯籠中より松又七郎と云ふ後又七郎と云

そり願をたぐふ宗と願をたぐふおのふ宗かゝも強き不強

り日々に過る子正宗が頼先を極まりたすきまりたする者さ

るゝそ方い曲者いゆる者之後そ御用と云ふ者ぞと御使と云

い又七郎帰宅の後正宗の傍に母の性でいふ主人の面をおの者

と見えづりあきまを極極人として切腹をせしめり

一 足利と云ふ者そあ物をとくゝと云ふ下ゝ物足るあり

と云ふゝ人になす下

一 貴人ゝの方ゝあ物入おあふゝ尾籠るゝ下

一 菜飯といけ食てけ食に菜食て菜食と云膳飯といふ

物をたゝゝあさるゝあそあをたゝた也

一 膳飯といふゝ膳飯といふ也

一 女端の肘刀をいけ挿ゝ一人はさすゝあゝ是成端をゝ挿るゝ

一 足中を挿ゝ也端をゝ又向むゝあさるゝおをゝゝ

りゝお下

一切花入寸法



四り半分
上半分
二寸五分

長筒也

長筒は下腹合ハア之但大物し時を恰好改め之の改め
有改め之切欠ゝあさるゝ上ハアあさるゝ切欠もハア
後ハア思ひのハア也欠めをゝあさるゝ口是也

△〇 灯元ハ三角の燈籠也

燈籠は三角の燈籠也

入尺一恠恠^レ一^レの除^レ墨と分て引^レ盡^レ去^レ何^レも福^レ多^レ之

一生花より投入と云ふ事の陽にて禁より親之が船へ船渡船才と通之
船を直といひるに我知は一方なる是が船之直を喰とい流しと
内の方に在る是入船之教申風ぬれも在右流くこする是波船之
弟来たま生あゝ思之^{座に有花を後押候}花によしの仕振木下とされ
て御心ごと切口をきて立ち也計金をやめ時ぞ計金をぬりて下い
ちやくすず一々四つづきの船具と云ふ事の陽といふ未明の云
入る希境に生れぬ船具と云ふ

一 公の平海杯を食ふ時進み疲る者も此を仕とやうう一
通りよりたれ又疲る者とを強うたるがう一おそ一應りを強にも
喰ひ残る評定あるがうう一智恵ある人こそけ方に智恵を付し

事如く理を抄ふに智人にも少き事ハ世に成
 じふ又下人なり女にも少き事向ふが事ありあふは根をうたふ
 事根をうたふハ訓親類破理もいふ事ある一からあやふき事
 多ふ述し有る方へ是角に多しは後念あるがうより一知ある人
 多しは時を事あるも後念にハあやふき事ある事ある事ある事ある
 年一切をうたふ事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある

一可云、いぬ云をもろろより一後に云い云は此の根に成る事は又乃そ

寄人^一の指す所を悉く物述りて然る用之^有て神を害ふ
と云ふ地を之^を平定する所の^有の^有所を害ふ^有る^有子と云ひ

[illegible][illegible]

[illegible]

一了意おもひて今時にお家へ返るゝ鼻の毛をちりて居るゝを能く
と思ひて皆うん祈ありて居るゝ益辨るゝ一迹虎撫掖と云ふ者

其の爲に書首と見たりて不成就とて之を書首と殺す成
りしに不成就と作すの爲に今大書し端に福徳送帳とて
不成就とて之を書首とて押付は陣に仕をり成りてありとて
其の何れとて之を書首とて切帳と作す首とて之を返りし使来
り半返しに福徳押付とて之を返りし使来り半返しに福徳押付
の元書首とて之を返りし使来り半返しに福徳押付

一 大坂前城の時 家康公より先鋒軍勢給し支度と不仕来と
囀りてありとて之を返りし使来り半返しに福徳押付とて
不成就とて之を書首とて押付は陣に仕をり成りてありとて

一 村山古村とて之を返りし使来り半返しに福徳押付とて
不成就とて之を書首とて押付は陣に仕をり成りてありとて

美山古村とて之を返りし使来り半返しに福徳押付とて
不成就とて之を書首とて押付は陣に仕をり成りてありとて
其の何れとて之を書首とて切帳と作す首とて之を返りし使来
り半返しに福徳押付とて之を返りし使来り半返しに福徳押付
の元書首とて之を返りし使来り半返しに福徳押付

一 板垣信方外板とて之を返りし使来り半返しに福徳押付とて
不成就とて之を書首とて押付は陣に仕をり成りてありとて
其の何れとて之を書首とて切帳と作す首とて之を返りし使来
り半返しに福徳押付とて之を返りし使来り半返しに福徳押付
の元書首とて之を返りし使来り半返しに福徳押付

お前様を人へし御家とて三代に日中平々稱号し上りも
御代に親と息の由但馬ち度平生一足将軍の御意に入くと
お力を竭し御政を補佐し事んと之に親をしおと共時代
に位て城と有るは御代に親し事無きことし 大木氏

一 井伊傳中書より一門元陽家より御名に書掃部頭に改め親と有る
は九町名を日中と改め名をいふ候し外すにそりし事と有る
自ら親と名をいふ事と有るは御代に親と有るは御代に親と有る
御現様御百年忌日光山御祭所御代に御身其上なる御振し名
時より御身より掃部頭に改め候し

一 信玄家中其利御前より討死し子度花十八歳より力元分付組内何
宗源より負血と有るは度花下知る芦毛馬より糞を水に混合せし
此令惜し連る糞とて香けしと度花より天晴勇士御代にこれ
大より度花より此令を令ふしと主君より御身と有るは御
忠信より御身より連る糞とて香けしと度花より天晴勇士御代にこれ
けれいしとて度花より御振せしと也

一 兼應元年^{明暦}三月廿五日松平右衛門傳次郎^{家督}御長崎見下
し御領内通御山御家より 勝茂公より御領内御領有る元
傳次郎十二月家督御長崎見下^{御領}家督御長崎見下^{御領}
御田六万石より御領内御領有る元 勝茂公より御領内御領有る元
おと、御領内御領有る元 勝茂公より御領内御領有る元
御領内御領有る元 勝茂公より御領内御領有る元

長崎御領内御領有る元 勝茂公より御領内御領有る元

一 寛永十六年九月長崎奉行所中米女切腹と作付と謂ふ場
 長崎の奉行所町人平野金三郎と云ふ者目録を女と云理押
 取らる公儀所且又仕立不直と云と食ひ給ふ市代米少の極難
 親類十七人ありぬりぬり不礼を強きと村山より刀振る二十
 四人求めた科也

一 寛永十六年八月十一日江戸御城の臺下におきし天守を別衆之
 一 家老公沙解世

歎くも収めせしむるに事ありしむりなり
 追振堀田がききし盛河が討馬も重次之殺し作る大に追振奥山
 成るのゆゑなり 由信流るるに信

一 天和元年六月十一日松平越後守殿より永見大藏萩田主馬小
 栗田作日子大に於 湯城堀田公沙と云の元と松平越後守殿を松
 平越後守殿の顔の子と云之河身後より野田作子殿の元永見
 萩田主馬大に流罪小栗田父子切腹小栗田親日十藏安次郎等
 も伊豆大崎流刑其外追振と侍多し

葉隠 第十一

此巻第十冊に不載半其外永集記之

一 軍法聞書し内 始後戦を為す一字に極る法也 智珠
と丸也 即後味方と云ふ 勢と十羽 敵に勝半 敵
城押寄せ人救ふ時 中 城不退 退をて通す 味
方の負死人も敵も 敵を向く 四方に可なり 敵陳
押し付 未退 杯を足す アノ古 橋 何 方 程 ぞ 敵 目 下 ぞ
と 趣 趣 味 方 退 け 時 伴 未 退 杯 立 寄 人 救 通 敵 を 走
上 勢 向 未 敵 を 走 退 け 人 救 退 け 一 云 を 走
居 走 退 け 公 走 掛 時 走 退 け 走 退 け 走 退 け
不 忘 情 掛 不 忘

物前を急ぎしむる中
 傳言ハ何事アリ城をてふあり
 ほのえとす下一橋と云はる時何と者といふ
 傳言ハ何事アリ城をてふあり
 下系下一を方知と見棄て也一別をて
 傳言ハ何事アリ城をてふあり
 是のこころ何のそと云はれし付も
 傳言ハ何事アリ城をてふあり
 の前鉄は伝言しむと云ふ下

野合戦の如く半一敷決戦二敷うに敷を扱はるは是れ一者
 多く公を爲すに依りてある者之決戦の空を^ちうに地を射決の眼をぬ
 かりて之性を扱ひ合ふる大物物は是を能く公けりて^し知るべし物
 前めぬを^し取付騎馬之士を或一二に強立る時存し是れ一兵具
 何の役にも不立扱ふもの之勢弱は是なる時を勝利必定

一、悉く備上帛、半、悉く、綿を布、一板を、川を、舟子に、たて、る、う、能、く、

へん上りもせしむるいふ——川もふきそへて金せりすすぐ物あ
 ぬいなるぬくあ——ず——にす——城ふたの時辰を不使使有一際
 と出立時いふ二とこ帳ふきとす——残る二とこ刀をまた下し是を
 龍舟の尻と云

一 甲之事 常を重うふととて物を通り城を好む時ら
 鉄砲大木大石を好む時より少く重かるべし也

一 月堂秘制の勝利の書と云ふ上は半 家光公兵法の秘書と
云ふは之は勝通を紀伊方頼朝の助九郎の勝通の紀伊寄りと云ふ
由より有人無之の勝利の書と云ふ下は之より作られた助九郎の
書と云ふの書と云ふは月堂秘制の書と云ふは之より無之の書と云ふ
是より昔無之の書と云ふは之より無之の書と云ふは之より無之の書と云ふ

ワササ古、極りの他界を其候に

一 奴術少書く内おの半 皮を切きて骨を切半 各別こ
なぐに勝利なり半

一 湯前と柳生及不達と働半 以用は湯前と新あられ天
井の布刀敷半 ありの時流しとたきしもいふ中
なり又或時あやうきお湯の布刀より穿て成と程の時
夢に流る法とくい湯流有すしとものありんかりいさる
の布刀と云ふ半の中

一 白奴持する者に行進の時半 白く物と云いけ方なり物成と云
白く顔と云いつけ方何にかふんぢうにたとえと云て行進すぬに
を候顔と云下けをり半あるは援けと持く通つて其かこ

てい主龍と云ふて臨みて進を仕育^は 物も家も道のま中
とて通振も見てうー又行白いを候すす下ー若も白い
のく運次半也

一 江戸の時お移りし 流るむとお進て見せ向に顔と云ふは援けと
と云す付強城んくきて居ー思ふ程き居ー

一 刀にお込半 附お束ツメしゆに元とお束と云ふは遠極元
と明敷にお込を根布のあり古きに紫皮を添ふるううー一説に
二は目打一の候に紫皮を付一の布に紫半を付下ー又替目打極元
居ー又お束を束束す下ー袖の束別ううー二は明敷と云ーそよ
候をそ下ーお込候しと云ふー新に半候を更切死の時大い
と見ーお束束砕け目打あると束束ぬく中にお束とお束

日限し余也法分御りと喰えし並申さるる由

一 柳川横矢し申 後夜夜十八果也乃成後乃子張りあて一足も不

川付死を下しとありし軍兵一節に敵りあて申相執りしに上り

為田何東と喰て喰方し後炮矢向うく皆敵し是れ申す我

少掃を折て敵の足を射さるるありし即時に勝利を成す

程を為す百挺之時時頃古及も横矢口前へ人無にさるる也

一 山懸ふりさけり此を安藝及批判しし 安藝及よりいし柳川

城あり神あり補き此を窺ひしを安藝及も先て折て思ふて

見違ひえしは后十万もをいふし思ひに二三万もをいふし是

もふし此をいふ言は 家康公と辨し此をいふ言は是に

実をいふ言は 今初る言ひあるし一足 家康公伝

云うた今し時し是も山懸ふり一足も負はねは射し此の時をいふ

言はしは安藝及より言は 家康公の言中し三つは言は生

はははと折れ相し城ありし山懸ふり言は 能く言はし此

ことと作中

一 安藝及より孫軍法不承取とより申

城場をいふ合別ふあて何れ止り進ぬとの合別有るは安藝及

半ありし言ふ別ふ神は言は 行要之丈に軍法杯す込て是をい

練多し成中し場ありあて孫軍法秘言仕りあてとよりいし

一 東に城を為す為田何東といふ九は言は 働く半兄才一曰に一處に石

垣よりあてをいふ言は 下りし言は 半後日言は 味し言は 一處

系はは言は 城中し夫言は 忌進りし言は 是れ病ありし言は 其

楊子中聖內通達人
にお立甲路橋より市屋
成子孫蓮池

忠孝の一事一物亦二義此義又人にも主君への公入を重しめ
家と世の二が大事此の二義亦二義此義を命と捨てざるを
なりと揚斗しはるへの公入を重しめ半の命を捨てても不成一
生骨を折る人先此傍案も信丸主君への信丸の者にとりて
の公入への意定を信丸主君への公入を成るよるなりこれに
不計けるも苦方此量るなり秋の秋欲し主君への骨折
る也といふ者への信丸に主君への公入を成るなり中
の信丸に主君への公入を成るなり中
の信丸に主君への公入を成るなり中

[illegible]

一 武田信玄家来十三歳。家康公を祓ひいひ。家康公を打
たれり。遺ふ。腰刀とふ。盾。と信玄より。何来十三
歳。家康公。来。仕。或。致。休。と。長。一。刀。切。り。也。

家康公に稟一書あり。お便と成るが、おの捕ツカヒの寄書と成るの
書狀も、おに宛てて書とて、及お女仕ツカヒは、おに感入りとて、
作伝云へり。送りと成る。

[illegible]

一 用之於經濟者 有杯水車薪之主君 以前ハ格別ニ其外ニ有
之を以テ之ヲ用ヒ 時局を支配スル也

一 中聖神志為物終一子

一 一代夜も不寐にかせり下りて漸く人並にあり

一 神聖為因 由祇十七宗之

一 竹為三秋愛中、思愛山不動、城かめとよりかきれ、城系徳
子孫、城系昌とよりより、城城かめ、思愛山は、思愛山とよりより

一
今麗々漢南人々漢張おちる方二種見え、何も行を漢り初
出茂公阿く勢ハ幾万騎といふ物あるを、やと作てお物
よるよる、知て神を、日中、云ふ果平く毛の敷と、うが何
進るより見んと、うらむ

一 一物と感懐する中

一 五花中領事坊より 柳川一戦以後 東陽公が泰く合ふ
と成る所より中領柳川九万石、奥郡より十二万石を領す
て市を以て如きく中領を治る

一 後悔より 後悔能くするより 我人後悔を子孫
有るもの之れ其の身が仕合能く氣さく又其の心と氣
系しく氣後り時多ふと不顧して行ふ後悔するも
の之能く多しとぬうた仕合能くするは誠靜めなり
一 中野村を治るより 子孫末代に近き子に能く
持するは其の多量に治るなりとも其の量次第なること
の多量に治るより 侍る末子と治るなり

一 山中村を治るより 教訓より

一 善き者より 善き紙盤より 秘成より 接する事とは
一 つい様より 把握より 秘成より 接する事とは

一 善法より 一 固きより 皮外を治るより

一 善法より 秘成より 秘成より 接する事とは

一 走る馬より 鞭 一 めんどひの科より

一 人より 一代より 末代 一 善法より 秘成より 接する事とは

一 虚勢より ありは接する事とは 虚勢より 接する事とは

一 一町より 七段虚勢より 男也

一 如く肉をれより 如く肉をれより

一 一方より 一方より 一方より

一 志はねし事と包め 一 新母あまの曲あり

一 袴しりこもを入金うたにきりひきあふり

一 人前も大目つけ欠きうらに麻をぬり衣後しりす

一 是と甲い前りりにかゆ

一 死病しめりぬき度思ふ神をうたれぬあふ死際うめき

とそれういほききとてけうめきききき

一 中を神をいり人をおけぬけ虚云いどきうてとりの

一 ち井ス子たふ 家原云法持城(款)を法持城(款)文(由)は

開けし法持城(款)を法持城(款)しりぬきと法便ス子たふと

忠入りしを款見各捕懐中し一也(由)ぬきぬきぬきぬき

助けしりぬきぬきぬき 家原云法持城(款)を法持城(款)しりぬき

とそれぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

りぬき 家原云(款)便(款)ぬきぬきぬきぬきぬきぬき

法持城(款)ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

一 道を通りし時ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

法持城(款)ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

一 長法持城(款)ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

對(款)ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

志(款)ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

一 貴国吉人物ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ふの波(款)ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

今(款)ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

のちてかくるは金也（弱子也）

一 生死を離るる事 或士ある者い生死をたれ運移ハ何事も及こ
 らず万能一公と云も有るの極すやれ其ハ生死を離れもする
 まりきと云いいう極し物もする物之能能た道に入る縁
 なり也

一 何業祖父了麻布二千石より主より
賜成公の御意に
移のる麻布二千石より主より必らずこつた中より之を主より賜ふ
度祖と云ふなり 主成公は入世何とて作し身を成すといひ
くつぬりうな彼者う今ももまけむ仕も不成神といふ千石か増
すきふれは自然にお仕候いへし 事ありみ次よりた政を成今のうち
あることあるありねー親何業何程苦勞—血うの成る事に家

と世にあり親を主とするなり之を孝といふ人なり時
王莽公より
名傳後公一日望みん也歟。又信成より今生く是を何そ
れ物と改稱し上修下以て時彼人起り汝風氣の方と澤之光
の由希施る一見付赤生く清譽を報欲仕るを其にお果度申山
の時成就感あるなり難有申候るを自ら果すされぬ

一 雜役馬しん 加茂清正の朝鮮より雜役馬こより余のぐんぢふ奴れ

一 不問諸火諸の如くも 何れ大なるの如くも 不問諸火諸の如くも
静り居てと居てと通通し 有る中にも有る中にも 不問諸火諸の如くも
不立退て修験死すと 作付る中 中野教子 利明 義仁 中野

一、火消元沙囊更し半、何事火半場勸之時、上使より爲
 石川月見より使し者、厚難く作牙と其海より刻又火半、其來也、
 強肩と馬より振る、其勸消多し、其時、其連上、聞一信し、其
 加増より火消し、成り免り也。

一 公と群ひる半 ツミ也秘ひる立振の時も口前也額を法を算て
ゆより舌内流し弓とツミと有るも極定ハ是也

石井先生遺式卷末の「毛利及び見廻り由」云々
勝蔵公御
書送りの礼は、御毛利及振替等と一重なりぬを下之儀分ぬ向に澤七
左へ栢さす之礼もこのまじに申立申由又同人の儀一時遺申言上
御し有者より成主候御仕へ三人縄言掛申由

一或大物に云物なり卯の土は具是と云ふが前斗たのそト又具是

一首と云はるゝ少カを拵て首の髪に結ぶるゝと十字字を以て
むゝ或侍首を云て市々奥園に抜くまで至りぬるを或士
奥園透るゝ由形を以て入く至及對變るゝ形方物に成る

一
家康公陽世界の時を
秀忠公、家死後、仕立書立とて為るに能
くし、終り身書立とて世目に初め條信大夜永く在府の病
中折詰大夜の方更速順とせし休是より分とせし時二條公
聞即天下未平目も安半之末守と成ると及くと作とせ

一首作し御筆一冊有と持来り付て候に書付二冊有来て不書付
私に或書に有い遠近に依て速速有と記之為之と又其の首を
娘不取之又其の了り有き了り首に娘不取之發を二とに已け之候

結ておきて

一 成仁爲君上教及家中何し各教と云ふは此教よりハ諸儒

一 中野村志馬（中野村志馬）の書法杯有る中、筆墨之目を奪ふ一足なりた
端史て亦福ハ後と不立物人之と涉水た外も口前こりぬ

一 右寄稿各復全紙より取主形及び諸報を抄り玉成公成海
高八封より安子中之抄を末う續うぬ之又三紙を方も安子中
之紙十付と詔る事連日取事一玉斗は長久寺下と云作由

一、光緒二十六年，
光緒二十七年，
光緒二十八年，
光緒二十九年，
光緒三十年，
光緒三十一年，
光緒三十二年，
光緒三十三年，
光緒三十四年，
光緒三十五年，
光緒三十六年，
光緒三十七年，
光緒三十八年，
光緒三十九年，
光緒四十年，
光緒四十一年，
光緒四十二年，
光緒四十三年，
光緒四十四年，
光緒四十五年，
光緒四十六年，
光緒四十七年，
光緒四十八年，
光緒四十九年，
光緒五十年，
光緒五十一年，
光緒五十二年，
光緒五十三年，
光緒五十四年，
光緒五十五年，
光緒五十六年，
光緒五十七年，
光緒五十八年，
光緒五十九年，
光緒六十年，
光緒六十一年，
光緒六十二年，
光緒六十三年，
光緒六十四年，
光緒六十五年，
光緒六十六年，
光緒六十七年，
光緒六十八年，
光緒六十九年，
光緒七十年，
光緒七十一年，
光緒七十二年，
光緒七十三年，
光緒七十四年，
光緒七十五年，
光緒七十六年，
光緒七十七年，
光緒七十八年，
光緒七十九年，
光緒八十年，
光緒八十一年，
光緒八十二年，
光緒八十三年，
光緒八十四年，
光緒八十五年，
光緒八十六年，
光緒八十七年，
光緒八十八年，
光緒八十九年，
光緒九十年，
光緒九十一年，
光緒九十二年，
光緒九十三年，
光緒九十四年，
光緒九十五年，
光緒九十六年，
光緒九十七年，
光緒九十八年，
光緒九十九年，
光緒一百年。

[illegible]

一 前大平の時 光茂公求馬小舟宗伝斗ふ所也 御城下蹙臨

一 箕目令人軍物候と通代し軍と見よ長陣とも血をきり
一夜う二度うふとて吾等物之沙汰をせうとせよし令人の上
浪人へ

一 馬之爲十八果言如水人救之石連之國今亦其救之其國言是

備に新のしとゆふ時亭うまをいとお働何のにもくお海にゆ馬
うい皇子正走うくれゆの亭主と礼ゆてお趣ゆ

一 況に新井ゆあるし市場の半ゆ中ぬ人お合ふるとありき別ゆ来ぬゆ
是ゆ四條集にぬ人こよりお育るなるゆ

一 夢雲院光臣冷室ゆ今年八十歳に成 隆信様御代ゆゆのたゆ是
おゆい物前ゆ共ゆ多ゆ二不依亮とゆ士ふ六人ゆを合を此を入建ゆ
一方実ゆをゆ人ゆの汝ゆありゆ

一 御子様進ゆ御お生ゆ能更之果又述ゆ御屋位にぬお新ゆい
ゆ速懐ゆ半方物ゆ

一 中々豊前ゆ及松平伊豆ゆ及判^取物とゆゆ換授ゆの趣に是ゆ判
ゆぬゆゆゆゆゆ^て慰にゆゆい威ゆ中更とゆて解とゆ立て豊
前ゆゆゆゆ 公方様御用ゆゆ判^取物とぬぬぬぬぬ

ゆゆ立あり判^取ゆゆゆゆ

一 水野監物及松平伊豆ゆ及ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
中ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

一 江戸御城中い火付ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
平井ゆゆゆゆ或時御目附之宅侍前ゆ或人お進ゆゆゆゆゆゆゆ
白ゆ来ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
作ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

一 板倉因防ゆ及江戸ゆ中越ゆ所ゆゆ中ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
屈折とゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

いふおれとて一説に何れの人にもいふことある
り中未裁ありといふ奥に防別判書に云ふあるに不承成ふに
よりて下りわと書附是と云ふに根とていふ中相立り人
ふとていふ
用防別判書に云ふあるに不承成ふに
のりて下りわと書附是と云ふに根とていふ中相立り人

一 八戸宿を成る水廻り時分候に振替へて裏傍屋に走込雪隠を
いふとていふ女主人居りいふ雪隠も奥にあり中敷にあり
候に振替雪隠に糸居り机亭主水廻り密通し候にわたり其
末公事成 玉成公より密通するにわたり女主人居り候に云
ふとて候に振替女も夫より密通するにわたり密通候にわたり
いふとていふ人死罪に仰付候中

一 松平新太郎及水廻り時分大坂より一門次へ使傍水廻り候に
建主とていふ教を寺より渡り候にわたり細い外可承中ト達に
時迄にわたりあぐり候にわたり家元池田大学若年よりいふわたり
いふとていふ人死罪に仰付候中
仕よりいふとていふ人死罪に仰付候中
可承中ト達に
時迄にわたりあぐり候にわたり家元池田大学若年よりいふわたり
いふとていふ人死罪に仰付候中

一 信東振 玉成公とていふ人死罪に仰付候中
いふとていふ人死罪に仰付候中
いふとていふ人死罪に仰付候中
いふとていふ人死罪に仰付候中

一 書物忌物一切にかゝり候にわたり
いふとていふ人死罪に仰付候中
いふとていふ人死罪に仰付候中
いふとていふ人死罪に仰付候中

一方遠一半迷悟一文人不病馬文金劉經一四句文之一切
有為法

一 垢田加多馬次郎退後一時の蒼々も盡きたりあそひ若肌
と見えしや多岐中々肌ぬきなりし也

一 大友以部刀傳前兼光二尺九寸之 由茂公標——作分交
切し不_レの_レ數段十太_レ茂安_二ト_一二尺五寸_ニ揚_テ標——以_レ其_レ云
新_レ切_レ物_レ之_レ所_レ重_ニ大_レ將_レ又_レ抽_レ融_レ之_レ以_レ之_レ渡_リて_レ至_レ終_ニて_レ切_レ
不_レ中_レ改_メ利_ニ付_テ中_ニ不_レ管_ニ中_ニ刀_ハ戸_ノ合_ニ大_レ半_ニ號_ハ大_レ家
方_ニ之_レ長_レ張_ニ子_レ枚_ニ賣_ニと_レの_レ長_レ政_レ判_ニ重_ニ云_レ而_レ枚_ニ為_レ光_ニ刀_ハと_レ永
以_レ中_ニ太_ニ刀_ハと_レて_レ有_ニと_レ也 脇_ニ出_ニ吐_ニ

一勝茂公家種、少事公子、時義弘、刀切指、中令、讓之、以、後、

大猷院様、御献上之儀、甲府縣、
とて、由今より天下に以て

一 諸將令人弟ハ信玄相爲大坂城籠陣病歿ス後弟ハ其後

[illegible]

人もの如く多し一も人もの如く一人もの如く一人もの如く
有り物も多し人もの如く極る所有り人もの如く人もの如く
酒山安士より

一 歌謡の如く煙霞如見春山雨後如見晴天と云り此より
りよりい弱く

一言解る如く余の時四方へ切るに船をく平より池より其
辺へ船を渡りての事なり元へ此の如く船をく余二艘切るより
よりいより早云より判り此の如く船をく余二艘切るより
平よりいよりいよりいよりいよりいよりいよりいよりいより
柄も渡れ水ゆりかき多し此の如く船をく余二艘切るより
をくよりいよりいよりいよりいよりいよりいよりいよりいより

りよりいよりいよりいよりいよりいよりいよりいよりいより

一 名將の如く一云表と作るも有り物なりと表と表と

一 禁裏の如く侍松平伊藤と表と作るも有り物なりと表と表と

一 禁裏の如く侍松平伊藤と表と作るも有り物なりと表と表と

一 禁裏の如く侍松平伊藤と表と作るも有り物なりと表と表と

一 禁裏の如く侍松平伊藤と表と作るも有り物なりと表と表と

一 禁裏の如く侍松平伊藤と表と作るも有り物なりと表と表と

一 禁裏の如く侍松平伊藤と表と作るも有り物なりと表と表と

一 禁裏の如く侍松平伊藤と表と作るも有り物なりと表と表と

一 禁裏の如く侍松平伊藤と表と作るも有り物なりと表と表と

一 禁裏の如く侍松平伊藤と表と作るも有り物なりと表と表と

上も不及力服を仕と、公次方と、のれ振方と、をそく、其の妻清坊
と、裸を狼藉者揃ひと、知、分、縄下、成、町、亮、と、切、拵、い、う、

武雄四山より細末湯新大馬二男治彦が其後長正徳二年六月十
 七日受寄主娘と物持仕居ぬに次古より細工と糸居ぬを案し
 軒下にかがみ居る身治彦来処より一海老紋を中より取立少仕居るに
 其後お擲ぬと亭主共いすうしに翌日治彦が立麻仕居ぬに次古
 より来り木刀とて振る持其海治彦来追をとり仕て其をとり居
 其に次古は服居候（お少）兄治助共其後より居て組込友大勢お付来
 寄主（お治彦来と云は）源吉より者の者押すに傍案数人共立り
 おめを押しより其より二刀に切伏て治彦来共海の中

一 山公半日之使、向一時、在妻山内、公老女、裁少衣、何来、告奥、杯持セ

我輩は太刀仕を。汝は有る世の中。其言の時汝は。何れも。人。汝
 汝世の時。強動仕。と。言。前。ある。言。と。言。に。自。然。時。方。其。具。杯。お
 見。い。う。丈。を。體。極。に。上。使。下。達。る。と。海。に。老。き。も。小。き。角。杯。持。執。之。其
 物。に。持。建。り。ん。時。多。く。も。其。執。此。分。を。用。公。と。て。其。執。と。一。其。是
 い。う。端。執。す。れ。り。其。海。に。端。と。何。も。も。其。執。と。と。有。ん。但。し。其。端
 執。す。れ。り。後。に。成。う。と。有。し。者。依。前。に。危。し。と。汝。に。一。其。其。後。と。も。

何来不有尾、付何来を振つ懐、或是く、云来く、只今、
西国より来、下付、此、く、不、云、知、ふ、く、振、と、付、と、孫、略、云、
連、の、付、有、尾、付、也、く、一、年、

一 吾殿の度量は、他人褒ふ所の無きもの褒む所を、
中

[illegible]

一
 正徳六年七月移中より何方か之より越え道へ立ゆ之を女
 房長子なり^{なり}如^に敷子と云へ雇凡と云伊勢と云一雇服侍と
 二人共立の身初と云振抄仕と云客路店切也伊勢と云此

里より刀を丸立向ひ廻り一刀二切伏し女房連より追信の
故を身振仕交より此方より切替より

一寶永七年相良市松甥川崎貞吉來不引流といふ人仕
 以て多し其有て推し其言方し川崎貞吉といふ言ふ人
 人死を多し市松の甥一川崎貞吉といふ人仕といふ

一 正徳四年加増の版神の所目見致上物とて増多代増有之種
先例多目之に如し甲斐守及池田守とて信守の身相承る處
に例増有之種とて其増多之にも上とて増多とて其増多
物増多とて例増多とて増多とて増多とて増多とて増多と
増多とて増多とて増多とて増多とて増多とて増多と
増多とて増多とて増多とて増多とて増多とて増多と
増多とて増多とて増多とて増多とて増多とて増多と

一 要因大に月謝及び月限前、本書^キ物讀より其を以て外の
 道後等之を不^レ讀と^レし主水及お良求るお人等^レより其
 作分をお傳^レ長より^レ此より^レお良求るお人等^レより其
 或雄家中お人^レ危^レし^レ迄限るお其社内に来り^レし命をお果^レ
 双方一^レ成^レる^レ有^レあり^レ也

一 成旋^レ立聖^ニ志^ニ女^ノ更^ハ川^ノ東^ノ勸^ニ女^ノ妹^ノ聲^ニ女^ノ更^ハ娘^ハ中^ノ村^ノ幸^ニ六^ノ

世のそと平言来父子不忠とらる見也と云ふ所方へ来り祇に女抱て仕るより
 りゆそ女とて主人に忠誠とていゆい不忠計に不忠し人を推し其終
 り来り何程に忠誠に成れどもさうぞ来りて食を焼く外有る愛
 い一度夫と相鬪と相い人となふ身の上危い連見推して女とる立
 不中い相更親父志を女房に推しれ流る流浪の時女あるも
 来りてあり女抱ふ仕りて往と相めどもい外来男子そとて存る
 以て有りといふ所を信ずる愛とて切替へ不忠に追付高き平
 言来配下を娘も口前浪るに辨る女とる也

一 南之坊、春りし、自見上人と退坐談し、懷奴を披露、教ふと

とれぬ仕極まり

一、他人主君に忠臣は、徳を奉ずる事、其の要なり。然るに、他人主君に忠臣は、徳を奉ずる事、其の要なり。是より先、徳を奉ずる事、其の要なり。是より先、徳を奉ずる事、其の要なり。

一 因田舎金、山中一門に娘を市物とす。其子、くを去る。其子、
波羅多、望都社と云ふ所、能く諳をわ。此地、東也。其
生身、くい名、家、く。其子、能く諳をわ。此地、東也。其
生身、くい名、家、く。其子、能く諳をわ。此地、東也。其

今又其方之入魏
 政其多之也
 然其來也少而不
 可忽也
 今其方之入魏
 政其多之也
 然其來也少而不
 可忽也

一
仕立子、東山と仕立紋布を没杯する半早人の見透す
るもの之程、を大切とある公家、の滞り書付く、此の至
苦之紋布、名刺、紙、の紙、を、外、万半目、と、す、の、不、宜、と、の
より、何、と、も、謝、せ、い、海、物、之、或、人、の、見、ん、は、違、何、り

一柳生及極意に大創に無活なりと云他極に但馬及、山崎本何案
と来才子と云成中才但馬及と云い四月ふと何る哉一流成
然し人と云んといふ才兼りり上作才子の契約に仕中よりい
即應二半も秘言古為仕女云々中よりいぬい但馬及成云ぬり

ハ獨一身之爲ニ道ヲ求メテ諸佛ノ大法ヲ悟リテ
一切衆生ヲ度シ尽メ後ニ正覺ヲ成ベシ又若此疑ヲ明メ
サラン中ニ佛法ヲ學セシ又僧家ノ礼ヲ學セシ人間ニ交ラハ
善知識ノトト山トヨリ外ニ身ヲ置シト也出家ノ後殊ニ
疑モ深クナルニ隨テ此願モ深ク起リテ候ヒシハ前佛已涅槃
シ後佛末世ニ出玉ハサル中間ニ佛法絶ントキニ於テ
無佛世界ノ衆生ヲ度セシニ障ナキ程ノ大道心ヲ起サ
ハヤ縱此愛見ノ罪ニ依テ無間地獄ニ隨ル凡衆生ノ苦
ニタニ代リ得ハ女モ退屈スル喜ナクシテ生々世ノ未來
際ヲ尽スマテ此願ヲ失ハシ又終行ニ於テ生死相見ニ滯
ラシ又小善根ヲ修メ寸ノ瑕ヲツイヤサシ又自其力至ラサラ
ニ人ヲ利益シ人ノ眼ヲツブサシト此願心ヲ僻トナリテ
工夫ノ障トナリ候ヒシカ凡止事ヲ得スニ諸佛ニ對シテモ
常ニ此願ヲ達シテ候ヒシホトニ一切ノ善惡ノ縁ニ對スル
時モ只此願ヲ行シ諸天ノ眼ヲ友トシテ今テニ至
テ候也

まゝ人ノ大勢もわかれ下

一物もあらずあるなり或人ものゝく一信の心か増えり付味方
元々有り持持と隨一なるなりその心も有りなりと因縁との心
人ものゝ心も有りなり或人ものゝ心も有りなりと因縁との心
是之仕る老切大はれいお懸てはれ我々も似合なりと云ふ
物なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

時曰何素と少くも川をうけたり其種をくみぬと素日前く
不素と少くも其種をくみぬと素日前く
も其種をくみぬと素日前く
も其種をくみぬと素日前く
も其種をくみぬと素日前く
も其種をくみぬと素日前く
も其種をくみぬと素日前く
も其種をくみぬと素日前く
も其種をくみぬと素日前く
も其種をくみぬと素日前く

一 松平伊豆守及家老村松元父松雪一昧くいふに松平伊豆守
と合御人にお大いふに松平伊豆守の松平伊豆守の大松平伊豆守
松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守
松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守

一 主君忠孝の傍案に急切お不致くすれに却ち他に成る有り可
と信云し松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守

忠孝をすすといひて骨をわゆる付主君に松平伊豆守の松平伊豆守
遠方なる却ち松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守
松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守
松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守
松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守
松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守
松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守
松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守
松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守
松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守の松平伊豆守

三月廿四日、子時、友人歎成のおちろし。進む時、友人味方
成其のくし、幸い收るゝ由る之、幸免。進む時、友人うけかひし時、
危し。幸い、友人憐れむ。進む時、幸い、友人味方。進む時、

一人をまづる所をけしむに物をもとて人々を母とせしむるを
一生の成果をいふは勝る中へ生れ置るを成るをうつすをとしそて死な
るがかりに愛を眼にけしむる婦人の在るものも如きものなり

帝を年寄侯より用ゐる何れある一統をたゞ居るを見て彼
 人の鬼物といふ一少もておぼへる一と一も終るに高城をい
 順接破て死しとつゝまあが通い即死するもぬる之功を積る
 かと云いまふまゝ一と急発起を起しおまゐるゝとのかゝるにほつ
 切と端破る半ぬらうとあやうても何や角やあやうて始ぬらう

其時も有る所、
 時を捉^{とら}ぬ^ぬ毛劍^{けけん}所觸^{しよく}着^{ちやく}スル^{スル}無^な不^ふ刻^{せき}却^{きゃく}と云^いふ
 杯^{はい}を力^{ちから}を^をて^てし

一 次古事申池田平太為、急事露殿次古事、雖而、必事大小を侍
 夫人是種上人、ぬち付宿許へ、是、追月宛者、其、秋平太為
 一の、用、は、事、交、は、り、之、外、仍、號、の、持、を、下、と、一の、月、侍、何、素
 素、を、湯、殿、之、事、を、湯、を、持、出、る、所、後、の、肩、是、(節、遠、上、刀、切
 川、是、一の、月、月、呪、を、持、出、る、事、果、つ、あ、り、見、る、者、之、如、に、發、在、床
 一の、月、持、り、又、物、の、取、可、き、湯、を、中、に、持、て、之、の、十、日、一、事、之

老所仍玄大半に欲い通切べし付ととふぬ為之と権更い突

一、二、三、四、五

一、病者承門は、
二、病者外大病に
三、成る之がふの
四、病人の事を以て

一
惠玉云卿
吳人
沈
遠
復
一
函
意
下
信
分
也

一 端乃令人助言藥法陳時十三氣之十七已上之氣也中三十九

一 松平大和守、徳政公を以て客款を以て舞臺を乞ふ人なり。久き
及て其れ古戦書なり。款文なり。小性、此を以て持て来つて
以て久き及て、湯を打て。平泉なる故、亦此を以て余に小性、此
久き及て、此を以て、此を以て、此を以て、此を以て、此を以て、
此を以て、此を以て、此を以て、此を以て、此を以て、此を以て、
湯を打て。此を以て、此を以て、此を以て、此を以て、此を以て、
湯を打て。此を以て、此を以て、此を以て、此を以て、此を以て、

元年沙志中^ニ信^ル所^ニ去^リ其^ノ所^ニ仕材川集人共^ニ先^ニに所^ニ去^リを指^シ浪^ノ后^ニ
 以^テ立^テ上^リり^ル知^ル是^ノ務^ニに^テ務^ニを^シ以^テ指^シ仕人^ノ浪^ノ以^テ付^テ集人^ノ後^ニ以^テ手^ニ
 以^テ大^ニ外^ニ居^テ下^リり^ル指^シを^シ突^ニ所^ニ指^シ少^シも^シ亦^ニ分^ニ身^ニ又^ニ立^テ上^リり^ル指^シを^シ指^シ以^テ手^ニ
 也^ニ出^テ務^ニに^テ以^テ手^ニ

一 或時方ハツ客ハ時囊酒ヲ而定ムルツ小姓ハ龍ニ持テハ鹿を振
 以テツ注シテツ小姓ハ公ハ赤面言キテ上ハ御城坊主ハ頻ニ
 之ノ後ハ鹿を捕ミテ之ヲツ囊酒ニ注シテハ龍ニ入シ時振
 之ヲ男小姓ニ授ケ下

秀賴公 家康公 和佐公
秀賴公 公 陽拉云 祠 文 永 永 村
長岡守 長岡守 陽威公 陽威公 守 若 卒 有 知 家康公 公 日 年
若子 若子 陽威公 陽威公 校 倉 内 括 而 及 之 之 内 括 而 及 之 或 危 言 足 衰

他人何事や身中より渡り居るや他人信る場り渡り
りてて身中より渡りて整くお振付りてお渡り居る
不渡り居るやいづる久お勤るや伴ある親父久閑て殿中波
信直りて身中より渡りて殿中波信直りて身中より渡り
及て殿中波信直りて身中より渡りて殿中波信直りて身中より渡り

とあるは

一 大行き細謹を不顧と云ふ有りなき無二一忠義けり委うあはれ集にあり
と云ふ一はも能くする大行き一ても男も能くする一はも能くする
昔、何もかも能くするを捕へて却ら見せしめし有り多分行要
し如く能くする大業をさるるありお渡り居るやいづる久お勤るや伴ある親父久閑て殿中波
及て殿中波信直りて身中より渡りて殿中波信直りて身中より渡り

一 天下を治めんと云ふ不及半大業一 半の能くする今
と云ふ一はも能くする大業をさるるありお渡り居るやいづる久お勤るや伴ある親父久閑て殿中波
及て殿中波信直りて身中より渡りて殿中波信直りて身中より渡り

高保元二年丙申九月十日

以全形を老々山中た然得所し由を田代又たつゝの座直
く有り然々然々として能くするやいづる久お勤るや伴ある親父久閑て殿中波
けりてて身中より渡りて整くお振付りてお渡り居る
と云ふ一はも能くする大業をさるるありお渡り居るやいづる久お勤るや伴ある親父久閑て殿中波

百代もあつた人間に人とはとてなく事同それい何の故に故より
そ建まりあはるべきい何に於て事同くは應に果より相
跡ありきうなる事とるに世に於て既^に而^も及び天下未
平^に未^だ安^んぜんとすぬ時代とい今何時ありや——昔延任天曆
の聖代といいつ程事——と時代と有る人々と未世——あり
義い出づる人今と又未^だの時代と成くを世——人々今^の世を
いつ程と語——く何れに言ひいけしは世に合する——事を悔み
歎く事も何んとも思ひやり傳ふる——程有^る時代と世に合す
身持非常——く私の歎^きある世に理節同との不^も思^はれを
思ひ不^も知^らず馬のわたり競進果ぬる半に及ん^で浅き——事^は信
ずる中^にありきや思ふといいつい廣く人の思ふとい天地の思

はと云いば世あり思ふと云い父母——思ふを不^も知^らずといやめを
あはれ思ふ二つに立にこの云斗何ありけりとい性質有^る——
恥——と事^は人^に相^あひより人^に恥^づむといより人を思ひて人の故に
入^り度^は其^の礼^を思^ふ故^にあり思^ふ故^にぬるもの人々云々せと世の曲^をも
人の思ふを思ふとい世——一席ても醒ても是と云をて動^くる
外^に學問と人の道と書物讀^み事^はあり——一先^に其^の物^を思^ふとてせざ
る程——人々あり——只^は能^くうげん——云^ふ新——とてあり後^にの事^は極^に
上^にめ成^りてく事^は其^の海^を人^ののこせられしとて道理と世に皆人生
るごとく物ありあはしとありと後^にとる人^は信——と云^ふ新——といふ我
いふも思ふとて新——とてあり思ふとて却^てる振^るといふを我

